

「子どものコミュニケーション能力低下」言説の検討

—小学生と大学生を対象とした調査から—

大久保 智生・ 澤邊 潤*・ 赤塚 佑果**
(学校教育) (新潟大学教育・学生支援機構) (大阪府寝屋川市立石津小学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050番地 新潟大学 教育・学生支援機構

**572-0025 大阪府寝屋川市石津元町8番1号 大阪府寝屋川市立石津小学校

A Study on the Discourse of Decreasing of Communication Skill

Tomoo Okubo, Jun Sawabe* and Yuka Akatsuka**

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Institute of Education and Student Affairs, Niigata University, 8050 Ikarashi 2-no-cho, Nishi-ku, Niigata 950-2181*

***Ishidu Elementary School, Neyagawa, 8-1 Ishidumotomachi, Neyagawa, Osaka 572-0025*

要 旨 本研究では、「子どものコミュニケーション能力低下」言説について小学生と大学生を対象とした調査から検討した。研究1では、現代の子どものコミュニケーション能力は過去と比較して低くなっていないことが示された。研究2では、半数以上の学生が子どものコミュニケーション能力が低下したと考えており、テレビなどによる少年犯罪の増加などの誤った報道がコミュニケーション能力が低下したと考える要因であることが示された。

キーワード コミュニケーション能力 教育言説 小学生 大学生

問題

近年、子どもや若者が変わった、危険であるという指摘がしばしばなされる(広田, 2001; 瀧井, 2004)。子どもや若者をめぐる問題や事件は数多く報道されていることから、現代の子どもや若者については、否定的なイメージでとらえられ、過去と比較して悪くなった点や低下した点が話題になる。とりわけ、近年、現代の子どもたちのコミュニケーション能力の著しい低下が多く研究者によって叫ばれている(廣岡・中西・廣岡・後藤・横矢・矢神・福田,

2005; 河村・藤村・浅川, 2008; 大畠・本田・北原・津久・中山・根本・小林, 2002; 田崎・坂本, 2002)。

また、近年、多くの研究者によってコミュニケーション能力を高めるための研究も行われている(廣岡・中西・廣岡・後藤・横矢・矢神・福田, 2005; 犬飼, 2003)。こうした研究が数多く行われていることから、現在の子どものコミュニケーション能力について「低い」という暗黙の前提があることは明らかである。しかし、暗黙の前提としてコミュニケーション能力の低下が述べられているが、現代の子ども

たちのコミュニケーション能力が「低い」というデータは明確に確認されていない。つまり、現代の子どもたちのコミュニケーション能力が「低い」という事実が確認されないまま、研究が行われているのである。したがって、コミュニケーション能力を高める研究を行う前に、現代の子どもたちのコミュニケーション能力が低いという暗黙の前提について検討しておく必要があるといえる。

このように根拠なく、社会に流布していることや一般的に信じられていることは「言説」と呼ばれる（広田・伊藤，2010；大久保・牧，2011）。「言説」は、強力な影響力と説得力を持っており、暗黙のうちに人々の間で自明で常識的なものと考えられるようになる（今津，1997）。そのため、一般的に広まっている言説について、我々は何の疑問も感じない傾向にあるが、このような言説は、実際に調査をしてみると逆であることが多い。例えば、近年、少年犯罪が凶悪化し、増加していると言われているが、実際には凶悪化も増加もしていないため、少年犯罪の凶悪化言説が誤りであることは疑いない事実である（鮎川，2001；広田，2001；マツァリーノ，2004）。子どもたちのコミュニケーション能力についても、社会に流布している言説に振り回されずに、現在と過去を比較し、実際に低下しているのかについて検討する必要があるといえる。

本研究では、子どものコミュニケーション能力の低下言説に焦点を当て、その検証を行っていくが、心理学では、コミュニケーション能力は主に社会的スキルとしてとらえられている。「社会的スキル」は、「相手から報酬を受けるやり方で行動し、罰や無視を受けないように行動する能力」（Libet & Lewinsohn, 1973）や「相互作用をする人々の目的を実現するために効果のある社会的行動」（Argyle, 1981）などの定義があるが、今のところ統一的な定義がないのが実状である（相川，1996）。字義通りに定義すれば「他者との関係や相互作用のために使われる技能」（相川，1996）といえるため、本研究では社会的スキルとコミュニケーション能力

とはほぼ同義として扱うこととする。

本研究では、まず、現代の子どものコミュニケーション能力は低下しているのかについて明らかにする。したがって、小学生を対象として、社会的スキルを測定し、現在と過去のデータを比較し、検討する。その際、戸ヶ崎（1993）と嶋田（1996）によって測定された過去のデータと比較する。両尺度とも妥当性・信頼性が確認されており、小学生の社会的スキルの平均値と標準偏差が示されているため、これらの尺度を使用する。さらに、なぜ現代の子どもはコミュニケーション能力が低下していると考えてしまうのかについても明らかにする。したがって、大学生を対象とした調査を行い、「現代の子どものコミュニケーション能力が低下した」という言説が、実際に社会の中でどの程度流布しているのか、どのような理由から信じられているのかについても検討する。

以上を踏まえ、本研究では、子どものコミュニケーション能力低下言説の検討を行うことを目的とする。まず、研究1では、これまで行われてきた研究の暗黙の前提の通りなのかを明らかにするため、現在の子ども（小学生）の社会的スキルを実際に測定し、その結果を過去のデータと比較することで、現在の子どもたちの社会的スキルが低下しているのかについて検討する。次に、研究2では、なぜコミュニケーション能力の低下という暗黙の前提を想定してしまうのかを明らかにするため、学生を対象としてコミュニケーション能力の低下言説の流布に影響を及ぼしている要因について検討する。

研究1

目的

研究1では、これまで行われてきた研究の暗黙の前提の通りなのかを明らかにするため、現在の子ども（小学生）の社会的スキルを実際に測定し、その結果を過去のデータと比較することで、実際に現在の子どもたちの社会的スキルが低下しているかどうかを検討する。具体的には、まず、現在の子どもの社会的スキルを妥当

Table1 各小学校における戸ヶ崎の社会的スキル尺度の平均値と分散分析結果

	A小学校 (N=180)	B小学校 (N=169)	C小学校 (N=232)	D小学校 (N=134)	E小学校 (N=141)	F 値
負の社会的スキル	33.04 (8.29)	31.60 (8.20)	33.64 (8.87)	33.42 (8.45)	31.74 (8.14)	2.10
向社会的スキル	52.45 (8.39)	53.04 (8.44)	52.19 (7.57)	53.90 (7.62)	53.14 (7.36)	1.11
主張性スキル	14.66 (4.03)	14.59 (3.86)	15.40 (4.02)	15.25 (3.61)	15.29 (3.64)	1.76
社交性スキル	20.89 (3.34)	20.63 (3.54)	21.06 (2.86)	21.29 (3.19)	21.31 (3.21)	1.18

カッコ内は標準偏差

Table 2 各小学校における嶋田の社会的スキル尺度の平均値と分散分析結果

	A小学校 (N=180)	B小学校 (N=169)	C小学校 (N=239)	D小学校 (N=134)	E小学校 (N=141)	F 値
向社会的スキル	20.54 (3.79)	20.99 (3.73)	20.80 (3.47)	21.41 (3.40)	21.05 (2.98)	1.30
引っ込み思案行動	6.32 (2.55)	6.60 (2.66)	6.29 (2.26)	6.02 (2.46)	6.09 (2.55)	1.25
攻撃行動	7.24 (2.23)	7.17 (2.35)	7.26 (2.28)	7.44 (2.12)	6.65 (2.26)	2.49*

カッコ内は標準偏差

*p<.05

性・信頼性のある尺度を用いて測定し、測定された現代の子どもの社会的スキルの調査結果について検討する。次に、過去のデータと比較を行い、実際にコミュニケーション能力が低下しているのかについて検討する。

方法

調査対象者と調査時期 2006年10月に埼玉県、香川県の公立A～E小学校5校の4～6年生874名を対象に調査を実施した。

手続き 2種類の社会的スキル尺度を実施した。今回の研究では、過去との比較が目的であるため、平均と標準偏差が明示されている戸ヶ崎(1993)の社会的スキル尺度47項目と嶋田(1996)の社会的スキル尺度15項目を使用した。両尺度とも妥当性・信頼性が確認されているため、これらの尺度を使用することとした。回答形式は「全然あてはまらない」(1点)から「よ

くあてはまる」(4点)までの4件法である。実施に際しての教示は、戸ヶ崎(1993)の研究と嶋田(1996)の研究と同様に行った。なお、調査用紙には、本調査が学校の成績に関係がないこと、誰にも回答内容が公開されないことを明示した。回答は全て無記名で行い、回答者のプライバシーに配慮した。

結果と考察

現在の子どもの社会的スキルの検討 まず、小学校による社会的スキルの差を検討するため、A～E小学校5校を独立変数とし、各社会的スキル尺度の得点を従属変数として一要因の分散分析を行った(Table 1, 2)。その結果、戸ヶ崎の社会的スキル尺度では、すべての下位尺度において学校による有意差は認められなかった。嶋田の社会的スキル尺度では、「攻

Table 3 性別×学年ごとの現在の戸ヶ崎の社会的スキル尺度の平均値と2要因分散分析結果

	男子			女子			二要因分散分析		
	4年生 (N=82)	5年生 (N=126)	6年生 (N=169)	4年生 (N=85)	5年生 (N=116)	6年生 (N=167)	性別 F値	学年 F値	交互作用 F値
負の社会的スキル	31.94 (8.09)	34.17 (8.26)	35.45 (8.57)	27.66 (6.90)	31.35 (8.37)	32.65 (7.66)	28.78***	15.53***	0.54
向社会的スキル	51.20 (8.47)	51.18 (7.37)	51.02 (7.56)	55.52 (8.37)	54.45 (7.89)	54.73 (7.34)	40.66***	0.28	0.23
主張性スキル	15.57 (4.23)	15.52 (4.15)	14.68 (3.91)	14.88 (3.74)	14.85 (3.70)	14.94 (3.74)	1.51	0.96	1.35
社交性スキル	20.79 (3.27)	21.55 (2.90)	21.11 (3.19)	20.64 (3.20)	21.04 (3.15)	21.02 (3.24)	1.06	1.67	0.33

カッコ内は標準偏差

***p<.001

Table 4 性別×学年ごとの現在の嶋田の社会的スキル尺度の平均値と2要因分散分析結果

	男子			女子			二要因分散分析		
	4年生 (N=99)	5年生 (N=136)	6年生 (N=184)	4年生 (N=94)	5年生 (N=122)	6年生 (N=179)	性別 F値	学年 F値	交互作用 F値
向社会的スキル	19.89 (3.40)	20.39 (3.48)	19.87 (3.26)	22.26 (3.49)	21.86 (3.34)	21.79 (3.36)	61.61***	0.66	0.98
引っ込み思案行動	6.51 (2.67)	5.81 (2.22)	6.23 (2.41)	6.43 (2.39)	6.26 (2.47)	6.47 (2.65)	1.31	1.94	0.64
攻撃行動	7.06 (2.25)	7.32 (2.19)	7.88 (2.34)	6.06 (1.79)	6.80 (2.21)	7.08 (2.26)	23.12***	11.05***	0.67

カッコ内は標準偏差

***p<.001

撃行動」においてのみ有意差 (F (4,855) = 2.49, $p < .05$) が認められた。Tukey法の多重比較を行った結果、D小学校のほうがE小学校よりも有意に得点が高かった。したがって、D小学校の児童のほうがE小学校の児童よりも、攻撃行動が多いことが明らかとなった。この結果は、D小学校が荒れているというD小学校の教員からの情報からも、納得のいく結果といえる。

以上の結果から、攻撃行動でD小学校がE小学校よりも得点が高いという以外は、学校による差が認められなかった。このことから、以後の分析では学校差については考慮せずに検討することとする。

次に、社会的スキルの性差と学年差を検討するため、性別(男子、女子)と学年(4年、5年、6年)を独立変数とし、社会的スキル尺度の得点を従属変数とした2要因の分散分析を行っ

た (Table 3, 4)。その結果、戸ヶ崎の社会的スキル尺度では、「負の社会的スキル」において、性別の主効果 (F (1,739) = 28.78, $p < .001$) と学年の主効果 (F (2,739) = 15.53, $p < .001$) が認められ、男子のほうが女子よりも有意に得点が高く、また、5、6年生のほうが4年生よりも有意に得点が高かった。「向社会的スキル」において、性別の主効果 (F (1,739) = 40.66, $p < .001$) が認められ、女子のほうが男子よりも有意に得点が高かった。嶋田の社会的スキル尺度では、「向社会的スキル」において、性別の主効果 (F (1,808) = 61.61, $p < .001$) が認められ、女子のほうが男子よりも有意に得点が高かった。「攻撃行動」において、性別の主効果 (F (1,808) = 23.12, $p < .001$) と学年の主効果 (F (2,808) = 11.05, $p < .001$) が認められ、男子のほうが女子よりも有意に得点が高く、また、5、6年生のほうが4年生よりも有意に得

Table 5 性別×学年段階ごとの過去と現在の戸ヶ崎の小学生の社会的スキル尺度の t 検定結果

		男子			女子		
		4年生	5年生	6年生	4年生	5年生	6年生
負の社会的スキル	t 値	2.03*	0.92	3.20**	3.40***	0.02	2.95*
	比較	過去>現在	過去=現在	過去>現在	過去>現在	過去=現在	過去>現在
向社会的スキル	t 値	0.94	1.41	3.36***	2.48*	0.26	4.54***
	比較	過去=現在	過去=現在	過去<現在	過去<現在	過去=現在	過去<現在
主張性スキル	t 値	0.33	0.59	1.76	0.70	1.29	1.99*
	比較	過去=現在	過去=現在	過去=現在	過去=現在	過去=現在	過去<現在
社交性スキル	t 値	0.80	3.22**	1.72	0.18	1.43	1.37
	比較	過去=現在	過去<現在	過去=現在	過去=現在	過去=現在	過去=現在

カッコ内は標準偏差

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 6 性別×学年段階ごとの過去と現在の嶋田の小学生の社会的スキル尺度の t 検定結果

		男子			女子		
		4年生	5年生	6年生	4年生	5年生	6年生
向社会的スキル	t 値	0.82	2.72**	1.69	2.31*	1.49	2.62**
	比較	過去=現在	過去<現在	過去=現在	過去<現在	過去=現在	過去<現在
引込み思案行動	t 値	1.18	4.89***	0.23	1.10	2.15*	0.35
	比較	過去=現在	過去>現在	過去=現在	過去=現在	過去>現在	過去=現在
攻撃行動	t 値	2.90**	2.54*	0.05	2.87**	0.90	1.84
	比較	過去>現在	過去>現在	過去=現在	過去>現在	過去=現在	過去=現在

カッコ内は標準偏差

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

点が高かった。

以上の結果から、「負の社会的スキル」、「攻撃行動」、「向社会的スキル」において性差が認められたが、これは戸ヶ崎(1993)と嶋田(1996)の結果と一致していた。また、「負の社会的スキル」と「攻撃行動」において学年差が認められたが、これは嶋田(1996)の結果とは異なっていたが、戸ヶ崎(1993)の結果とは一致していた。このように今回測定した社会的スキルの性差、学年差の傾向は先行研究とほぼ一致していることが明らかとなった。

現在と過去の子どもの社会的スキルの比較 現在の子どもの社会的スキルと戸ヶ崎(1993)と嶋田(1996)によって測定された子どもの社会的スキルを比較するため、「過去の子どもの社会的スキル」と「現在の子どもの社会的スキル」を独立変数とし、社会的スキル尺度を従属変数として t 検定を行った (Table 5, 6)。その結果、戸ヶ崎の社会的スキル尺度では、「負の社会的スキル」において、4年生男子 (t=2.03,

df=264, p<.05), 6年生男子 (t=3.20, df=503, p<.01), 4年生女子 (t=3.40, df=247, p<.001), 6年生女子 (t=2.95, df=498, p<.01) に有意差が認められ、いずれも過去の子どものほうが現在の子どもよりも有意に得点が高かった。「向社会的スキル」において、6年生男子 (t=3.36, df=503, p<.001), 4年生女子 (t=2.48, df=247, p<.05), 6年生女子 (t=4.54, df=498, p<.001) に有意差が認められ、現在の子どものほうが過去の子どもよりも有意に得点が高かった。「主張性スキル」において、6年生女子 (t=1.99, df=498, p<.05) に有意差が認められ、現在の子どものほうが過去の子どもよりも有意に得点が高かった。「社交性スキル」において、5年生男子 (t=3.22, df=312, p<.01) に有意差が認められ、現在の子どものほうが過去の子どもよりも有意に得点が高かった。嶋田の社会的スキル尺度では、「向社会的スキル」において、5年生男子

($t=2.72$, $df=571$, $p<.01$), 4年生女子 ($t=2.31$, $df=71$, $p<.05$), 6年生女子 ($t=2.62$, $df=532$, $p<.01$) に有意差が認められ、現在の子どものほうが過去の子どもよりも有意に得点が高かった。「引っ込み思案行動」において、5年生男子 ($t=4.89$, $df=571$, $p<.001$), 5年生女子 ($t=2.15$, $df=529$, $p<.05$) に有意差が認められ、過去の子どものほうが現在の子どもよりも有意に得点が高かった。「攻撃行動」において、4年生男子 ($t=2.90$, $df=379$, $p<.01$), 5年生男子 ($t=2.54$, $df=571$, $p<.05$), 4年生女子 ($t=2.87$, $df=371$, $p<.01$) に有意差が認められ、過去の子どものほうが現在の子どもよりも有意に得点が高かった。

以上の結果から、戸ヶ崎の社会的スキル尺度、嶋田の社会的スキル尺度ともに、過去のほうが現在よりも社会的スキルが高いという結果は、どの学年の下位尺度においてもみられなかった。そして、比較されたものの約60%において、過去と現在で社会的スキルが変わらないという結果になり、比較されたものの約40%において、現在のほうが過去よりも社会的スキルが高いことが明らかとなった。この結果から、現在の子どもの社会的スキルは、過去と比較して変わらない、もしくは高くなっている可能性さえあり、低くなってはいないことが明らかとなった。したがって、これまでの研究が暗黙の前提としているコミュニケーション能力の低下は今回の研究からは確認されなかった。

研究2

目的

研究1の結果から、現在の子どもは過去と比較して、コミュニケーション能力(社会的スキル)が低下したとはいえないことが明らかとなった。しかし、現代社会においては、「子どもたちのコミュニケーション能力(社会的スキル)が低下した」という言説が広く流布している。子どもたちのコミュニケーション能力(社会的スキル)は低下していないにもかかわらず、低下言説が流布しているのならば、なぜこのよ

うな言説が流布しているのかについて検討する必要がある。

そこで、研究2では、なぜコミュニケーション能力の低下という暗黙の前提を想定してしまうのかを明らかにするため、コミュニケーション能力の低下言説の流布に影響を及ぼしている要因について検討する。具体的には、まず、学生に対して子どものコミュニケーション能力のイメージを尋ね、子どもの社会的スキルのイメージとの関連を検討する。また、子どものコミュニケーション能力のイメージの根拠について検討する。そして、子どもと触れ合う機会の有無を尋ね、子どもの社会的スキルのイメージとの関連について検討する。

方法

調査対象者と調査時期 2006年11月に埼玉県、大阪府、静岡県、岡山県、香川県の国立大学、私立大学、専門学校、計7校の学生合計801名を対象として調査を実施した。

手続き ①子どものコミュニケーション能力について持つイメージと根拠:「あなたは自分が小学生だった頃と比較して、今の小学生のコミュニケーション能力は変わったと思いますか」という質問に対して、「低くなったと思う」、「変わらないと思う」、「高くなったと思う」の3件法で回答を求めた。さらに、「あなたがそのように考える理由は何ですか。思いつくだけ書いてください」という質問に対し、自由記述で回答を求めた。

②子どもの社会的スキルについて持つイメージ:研究1と同じ戸ヶ崎(1993)と嶋田(1996)の尺度を使用した。「あなたは、現在の小学生についてどう思いますか」という質問に対して、現在の小学生はどの程度社会的スキルがあると思うかを「全然あてはまらない」(1点)から「よくあてはまる」(4点)までの4件法で回答を求めた。

③子どもと触れ合う経験の有無:「子どもと触れ合う機会はありますか」という質問に対して、「ある」「ない」の2件法で回答を求めた。

④教育実習の経験の有無:「教育実習の経験

Table 7 大学生の持つイメージと戸ヶ崎の社会的スキル尺度の平均値と分散分析結果

	低くなった (N=392)	変わらない (N=309)	高くなった (N=61)	F 値
負の社会的スキル	52.25 (7.48)	49.32 (6.81)	50.51 (6.91)	14.45***
向社会的スキル	41.36 (7.35)	44.80 (7.57)	43.87 (6.66)	19.06***
主張性スキル	13.76 (2.58)	14.72 (2.73)	15.57 (3.82)	17.58***
社交性スキル	15.40 (2.50)	16.90 (2.50)	17.10 (2.87)	34.76***

カッコ内は標準偏差

***p<.001

Table 8 大学生の持つイメージと嶋田の社会的スキル尺度の平均値と分散分析結果

	低くなった (N=396)	変わらない (N=316)	高くなった (N=62)	F 値
向社会的スキル	17.74 (3.13)	18.97 (3.09)	18.66 (2.62)	14.39***
引っ込み思案行動	10.26 (1.92)	9.31 (1.89)	9.02 (2.28)	25.88***
攻撃行動	11.18 (2.08)	10.54 (1.87)	10.95 (2.08)	9.06***

カッコ内は標準偏差

***p<.001

はありますか」という質問に対して、「ある」, 「ない」の2件法で回答を求めた。

結果と考察

子どものコミュニケーション能力, 社会的スキルについて学生が持つイメージ まず, 子どものコミュニケーション能力の低下言説がどの程度流布しているかを検討するため, 現在の小学生のコミュニケーション能力が約10年前と比較してどのように思うかについて, 「低くなった」, 「変わらない」, 「高くなった」と考える者の割合を算出した。その結果, 「低くなった」が51.2%, 「変わらない」が40.6%, 「高くなった」が8.2%であった。したがって, 「低くなった」と答えた学生が最も多かった。このことから, 現在の子どものコミュニケーション能力について低下したというイメージが半数以上の学生に浸透していることが確認された。

次に, 子どものコミュニケーション能力につ

いて学生が持っているイメージと子どもの社会的スキルについて学生が持っているイメージの関連を検討するため, 子どものコミュニケーション能力について学生が持っているイメージ(「低くなった」, 「変わらない」, 「高くなった」)を独立変数とし, 学生がイメージする子どもの社会的スキルを従属変数とした1要因の分散分析を行った (Table 7, 8)。その結果, 戸ヶ崎の社会的スキル尺度と嶋田の社会的スキル尺度の両方とも, すべての下位尺度において, 3群間に有意差が見られたので, Tukey法による多重比較を行った。戸ヶ崎の社会的スキル尺度では, 「負の社会的スキル」において, 「低くなった」が「変わらない」よりも有意に得点が高かった ($F(2,748) = 14.45, p < .001$)。「向社会的スキル」($F(2,751) = 19.06, p < .001$)、「主張性スキル」($F(2,761) = 17.58, p < .001$)、「社交性スキル」($F(2,758) = 34.76, p < .001$)において, 「変わらない」と「高くなった」が「低くなった」よりも有意に得点が高かった。嶋

Table 9 コミュニケーション能力の変化の根拠のカテゴリーと割合

カテゴリー	説明	例	低くなった	変わらない	高くなった
インターネット	インターネットの普及による影響	インターネットの普及	41	2	5
パソコン	パソコンの普及による影響	パソコンの普及	10	1	2
携帯電話	携帯電話の普及による影響	携帯電話の普及	39	0	8
ゲーム	テレビゲームによる影響	テレビゲームの普及率が高い	56	1	0
テレビ	テレビのニュースや報道による影響	テレビで見ているから	76	6	8
新聞	新聞の影響	新聞による報道	34	1	0
メディア	全般メディア全般による影響	たくさんのメディアが増えたから	5	3	7
家族との関係	家庭内の人間関係の変化	親や祖父母と話す機会の減少、一人っ子が多く大人と話す機会が増えた	33	2	1
友人との関係	友人関係や遊びの形式の変化	一緒に外で遊ぶ機会が減った、室内で遊ぶことが増え友人との衝突を経験していない	56	5	1
地域との関係	地域の変化、近所付き合いの変化	地域の崩壊、不審者対策で地域との交流が進み、人との関わりが増えた	9	0	1
少年犯罪の増加	少年犯罪の増加による影響	少年犯罪が増えたから	80	2	0
経験	子どもと実際にあった経験からの判断	実際に子どもと話してみても	56	96	13
推測	個人の推測による判断	なんとなく、みため	48	101	21
伝聞	伝聞による判断	周りの人の話を聞いて	17	0	1
その他	上記のカテゴリーにあてはまらないもの		4	8	1

田の社会的スキル尺度では、「向社会的スキル」において、「変わらない」が「低くなった」よりも有意に得点が高かった ($F(2,764) = 14.39, p < .001$)。「引っ込み思案行動」において、「低くなった」が「変わらない」と「高くなった」よりも有意に得点が高かった ($F(2,767) = 25.88, p < .001$)。「攻撃行動」において、「低くなった」が「変わらない」よりも有意に得点が高かった ($F(2,768) = 9.06, p < .001$)。

以上の結果から、子どものコミュニケーション能力について、「低くなった」と考える学生は、現在の子どもの社会的スキルについても低く評価していることが明らかとなった。一方、「変わらない」、もしくは「高くなった」と考える学生は、現在の子どもの社会的スキルについても高く評価していることが明らかとなった。間接的にはあるが、コミュニケーション能力と社会的スキルはほぼ同義であることが示唆された。

子どものコミュニケーション能力について学生が持つイメージの根拠 子どものコミュニケーション能力について、「低くなった」、「変わらない」、「高くなった」と考える根拠について、15のカテゴリーを作成し、分類を行った (Table 9)。15のカテゴリーは、「インターネット」、「パソコン」、「携帯電話」、「ゲーム」、「テレビ」、「新聞」、「メディア全般」、「家族との関係」、「友人との関係」、「地域との関係」、「少年犯罪の増加」、「経験」、「推測」、「伝聞」、「その他」である。そして、どのような根拠から、子どものコミュニケーション能力について、「低くなった」、「変わらない」、「高くなった」と考えているのかを検討するため、それぞれのカテゴリーの人数と割合を算出した。その結果、「低くなった」と考える根拠の自由記述については、「少年犯罪の増加」が最も多く、次に「テレビ」が多かった。「変わらない」と考える根拠の自由記述については、「推測」が最も多く、

Table 10 子どもと触れ合う経験の有無による戸ヶ崎の社会的スキル尺度の平均値と t 検定結果

	触れ合い経験有り (N=294)	触れ合い経験無し (N=475)	t 値
負の社会的スキル	50.88 (7.34)	51.00 (7.24)	0.22
向社会的スキル	43.53 (7.24)	42.60 (7.74)	1.65
主張性スキル	14.58 (2.85)	14.14 (2.76)	2.13*
社交性スキル	16.38 (2.57)	16.01 (2.67)	1.90

カッコ内は標準偏差

* p<.05

Table 11 子どもと触れ合う機会の有無による嶋田の社会的スキル尺度の平均値と t 検定結果

	触れ合い有り (N=299)	触れ合い無し (N=480)	t 値
向社会的スキル	18.42 (2.97)	18.25 (3.22)	0.75
引っ込み思案行動	9.70 (1.97)	9.81 (2.00)	0.75
攻撃行動	11.03 (2.06)	10.82 (1.98)	1.43

カッコ内は標準偏差

次に「経験」が多かった。「高くなった」と考える根拠の自由記述については、「推測」が最も多く、次に「経験」が多かった。

以上の結果から、テレビなどによる少年犯罪の増加の報道が、コミュニケーション能力が低下したと考える要因として示唆された。少年犯罪の凶悪化言説が誤りであることは疑いない事実であることから（鮎川，2001；広田，2001；マツァリーノ，2004），テレビなどのマスメディアの誤った報道にのせられて現代の子どものコミュニケーション能力が低下しているように考えるのだといえる。子どものコミュニケーション能力は昔と比べて変わらない、高くなったと考える学生は、実際に子どもと触れ合った「経験」から昔と比べて変わらない、高くなったと考えていることが示された。したがって、実際に子どもに出会い、触れ合うことで自分の子ども時代とあまり変わらないと考えるのだといえる。一方で、子どもと触れ合った結果、コミュニケーション能力が低下したと答え

る学生も存在する。この場合は、テレビなどのマスメディアの報道によるバイアスがかかって接しているためかもしれない。いずれにせよ、マスメディアの少年犯罪に関する報道の影響が非常に大きいことは明らかであるといえる（小沢，2009）。

子どもと触れ合う経験や教育実習の経験と子どもの社会的スキルに対して学生が持つイメージ「子どもと触れ合う経験」と子どもの社会的スキルに対して学生が持つイメージの関連を検討するため、「触れ合い経験有り」と「触れ合い経験無し」を独立変数とし、学生がイメージする子どもの社会的スキルを従属変数として t 検定を行った (Table 10, 11)。その結果、戸ヶ崎の社会的スキル尺度については、「主張性スキル」でのみ有意差が認められ、「触れ合い経験有り」のほうが「触れ合い経験無し」よりも有意に得点が高かった ($t=2.13$, $df=767$, $p<.05$)。嶋田の尺度については、全ての各下位尺度において有意差は認められなかった。

Table 12 教育実習経験の有無による戸ヶ崎の社会的スキル尺度の平均値とt検定結果

	教育実習経験有り (N=73)	教育実習経験無し (N=694)	t 値
負の社会的スキル	47.95 (7.32)	51.27 (7.20)	3.74***
向社会的スキル	45.51 (6.76)	42.69 (7.61)	3.00**
主張性スキル	15.49 (2.74)	14.17 (2.78)	3.88***
社交性スキル	16.88 (2.49)	16.07 (2.64)	2.49*

カッコ内は標準偏差

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 13 教育実習経験の有無による嶋田の社会的スキル尺度の平均値とt検定結果

	教育実習経験有り (N=73)	教育実習経験無し (N=701)	t 値
向社会的スキル	18.89 (2.90)	18.26 (3.14)	1.63
引っ込み思案行動	9.23 (1.82)	9.83 (2.00)	2.43*
攻撃行動	10.45 (2.08)	10.95 (2.00)	2.00*

カッコ内は標準偏差

*p<.05

以上の結果から、子どもと触れ合った経験のある学生は、無い学生に比べて、子どもの「主張性スキル」について高く評価していることが明らかとなった。他の側面では有意差が認められなかったことから、子どもと触れ合った経験がイメージに関連しているのかは明確にはならなかった。ただし、ここでは子どもと触れ合った経験のみを尋ねているため、どの程度触れ合ったのかについてはわからなかった。

「教育実習経験」と子どもの社会的スキルに対して学生が持つイメージとの関連を検討するために、「教育実習経験有り」と「教育実習経験無し」を独立変数とし、学生がイメージする子どもの社会的スキルを従属変数としてt検定を行った (Table 12, 13)。その結果、戸ヶ崎の社会的スキル尺度については、全ての各下位尺度において有意差が認められた。「負の社会的スキル」では、「教育実習経験無し」のほうが、「教育実習経験有り」よりも有意に得点が高かった (t=3.74, df=752, p<.001)。「向社

会的スキル」(t=3.00, df=755, p<.01)、「主張性スキル」(t=3.88, df=765, p<.001)、「社交性スキル」(t=2.49, df=762, p<.05)では、「教育実習経験有り」のほうが、「教育実習経験無し」よりも有意に得点が高かった。嶋田の社会的スキル尺度については、「引っ込み思案行動」(t=2.43, df=771, p<.05)と「攻撃行動」(t=2.00, df=772, p<.05)において有意差が認められ、「教育実習経験無し」のほうが、「教育実習経験有り」よりも有意に得点が高かった。

以上の結果から、教育実習の経験がある学生は、経験のない学生よりも、子どもの社会的スキルについて高く評価していることが明らかとなった。つまり、教育実習などある程度まとまった期間、子どもと触れ合う経験がある学生ほど子どもの社会的スキルについて高く評価していることが示された。したがって、ある程度まとまった期間、子どもと触れ合うことが重要であることが示唆された。

総合考察

本研究では、「子どものコミュニケーション能力低下」言説について小学生と大学生を対象とした調査から検討してきた。研究1では、これまで行われてきた研究の暗黙の前提の通りなのかを明らかにするため、現在の子どもの社会的スキルを実際に測定し、その結果を過去のデータと比較することで、現在の子どもの社会的スキルが低下しているのかについて検討した。その結果、現在の子どもの社会的スキルは、過去と比較して変わらない、もしくは高くなっている可能性さえあり、低くなっていることが明らかとなった。研究2では、なぜコミュニケーション能力の低下という暗黙の前提を想定してしまうのかを明らかにするため、学生を対象としてなぜコミュニケーション能力が低下していると考えてしまうのかについて検討した。その結果、半数以上の学生が、子どものコミュニケーション能力が低下したと考えており、テレビなどによる少年犯罪の増加の報道が、コミュニケーション能力が低下したと考える要因として示唆された。子どものコミュニケーション能力は昔と比べて変わらない、高くなったと考える学生は、実際に子どもと触れ合った「経験」から昔と比べて変わらない、高くなったと考えることが示され、ある程度まとまった期間、子どもと触れ合った経験の有る学生は子どもの社会的スキルを高く評価していた。以下において、これらの調査結果に基づいて考察を加えていく。

暗黙の前提としてのコミュニケーション能力の低下は妥当なのか

研究1の結果から、約10年前と比較して、現在の小学生の社会的スキルは変わらない、もしくは、高くなっていることが示された。つまり、現在の小学生の社会的スキルは低下していないことが明らかとなった。この結果は、現在の子どもたちのコミュニケーション能力が低いという多くの先行研究の暗黙の前提を覆すものといえる。これまでデータなどの根拠なしに、

現在の子どもたちのコミュニケーション能力は以前よりも低下したと推測されてきたが、今回の研究から、子どもたちのコミュニケーション能力低下言説が誤っている可能性を示唆するデータを示すことができたことは大きな意義があったといえる。

そもそもコミュニケーションとは、コミュニケーションをとる双方の問題であり、一方の個人の能力の問題だけではないはずである。子どものコミュニケーション能力が問題となるのならば、大人の側のコミュニケーション能力の問題も議論の俎上にあがってもいいはずである。しかし、子どものコミュニケーション能力が問題視され、子どものコミュニケーション能力を高めるプログラムなどが開発される背景には、子ども個人の能力や特性に問題を落とし込む社会のまなざしがあるといえる。このようにコミュニケーション能力の低下とは社会の、特に大人の側のまなざしの問題といえる。事実、コミュニケーション能力という個人の能力の問題に落とすことで、社会の側、大人の側のあり方は問われなくなる。例えば、教師の関わり方や学校のあり方などは問われず、見えなくなるといえる。こうした問題を個人の能力に落とす見方をするのは、自らが責任をとる必要が無いため、社会や大人の側にとって都合が良いのである。このようにコミュニケーション能力の低下言説によって何が隠されているのかを明らかにすることが重要であろう。

なぜコミュニケーション能力の低下が暗黙の前提となっているのか

研究2の結果から、半数以上の学生が、子どものコミュニケーション能力について、約10年前に小学生だった自分たちと比較して、低下したと考えており上昇したと考える人は少なかった。そして、「低くなった」と考える学生は、子どもの社会的スキルについても低く評価し、「変わらない」もしくは「高くなった」と考える学生は、子どもの社会的スキルについても低く評価していなかった。この結果から、学生においても「子どものコミュニケーション能力低

下]言説が広く流布しているといえる。そして、こうした言説を信じている学生は現在の子どもに対してネガティブなイメージを持っており、言説を信じていない学生は現在の子どもに対してポジティブなイメージを持っていると考えられる。

コミュニケーション能力の低下言説を信じてしまう根拠として、テレビなどによる少年犯罪の凶悪化の報道の影響が示唆されたが、少年犯罪の凶悪化はデマであることから、メディアの誤った情報を鵜呑みにすることがこうした言説を信じてしまう要因であるといえる。逆に、コミュニケーション能力が変わらない、高くなったと考える人に共通するのはどちらも子どもと関わった経験を持っているということであった。実際に子どもと関わった経験のある学生がない学生よりも、小学生の社会的スキルを高く評価したことから、実際に子どもと関わる経験によって、言説に振り回されずに評価できるのかもしれない。

こうした結果は、親や教師などの子どもたちの周りにいる大人が、子どもたちと関わっていく上で参考になると思われる。もし、子どもをネガティブに語る言説をうのみにしたまま子どもたちと関わるのなら、子どものネガティブな部分が多く目につき、本来の子どもの姿や長所を発見することが難しくなる。反対に、子どもはいつの時代も変わらないという視点を持ち、子どもと関わることで、子どもの長所や可能性に気づくことができ、それを共に伸ばしていくことが可能になると思われる。

さらに、こうした結果から明らかになったことは、マスメディアにしる、研究者にしる、目の前の子どもを見ていない可能性があるということである。見ていても、言説によるバイアスがかかった状態で見ているのかもしれない。そして、子どもがネガティブに語られ、子どものコミュニケーション能力の低下というマスメディアによる結論ありきの報道がなされ、研究者による結論ありきの対策が立てられる現状は、不安をあおりたいマスメディアとコミュニケーション能力を高めるプログラムを開発した

い研究者にとって都合が良いといえる。したがって、今一度、暗黙の前提を問い直し、自分の関わり方を見つめ直す必要があるといえる。

今後の課題

今後の課題としては、2点挙げられる。1点目は測定時期の問題である。今回の研究では、現代の子どもの社会的スキルと過去のデータを比較する際に、約10年前のデータを取り上げた。約10年前と比較すると、子どものコミュニケーション能力は低下していないという結果が得られたが、この結果は過去すべてにあてはまるわけではないといえる。過去20年前、30年前と比較すると、異なる結果になる可能性もあると思われる。実際、「小学生が変になってきたと感じ始めたのは、1985年くらいからのことである」と小林(1999)が指摘するように、20～30年前と比較すると、低下していることも考えられる。ただし、1990年初頭に小学生であった学生が低下してきていると感じていることなどを勘案すると、今後、さらに長期にわたって検討する必要があるといえる。

2点目はコミュニケーション能力概念の問題である。今回はコミュニケーション能力を社会的スキルとしてとらえ、検討してきたが、コミュニケーション能力については別の観点から論じることも可能である。現在では、コミュニケーション能力について、関係の多様化・流動化に伴い、求められるコミュニケーションが変わったことが指摘されている(浅野, 1999; 辻, 1999)。心理学の分野においても、大谷(2007)が高校生・大学生を対象とした調査から、友人関係における状況に応じた切り替えの重要性を指摘しており、低下したかどうかという観点では単純にとらえきれないのである。本研究では検討できなかったが、こうした概念そのものを再検討することも必要であろう。

付記

本論文は、日本社会心理学会第48回大会で発表した内容と「実践をふりかえるための教育

心理学」(大久保・牧編, 2011) で発表した内容を再分析したものである。

引用文献

- 相川充 1996 社会的スキルという概念 相川充・津村俊充(編) 社会的スキルと対人関係: 自己表現を援助する 誠信書房 pp.4-21.
- Argyle, M. 1981 The nature of social skill. In M. argyle (Ed), Social skills and health. Menthuen. pp. 1-30.
- 浅野智彦 1999 親密性の新しい形へ 富田英典・藤村正之(編) みんなぼっちの世界: 若者たちの東京・神戸90's・展開編 恒星社厚生閣 Pp. 41-57.
- 鮎川潤 2001 少年犯罪: ほんとうに多発化・凶悪化しているのか 平凡社
- 廣岡秀一・中西良文・廣岡雅子・後藤淳子・横矢規・矢神祥代・福田真知 2005 小学生のコミュニケーション力を高める教育実践(2): 教育学部・教育学研究科教育心理学学生によるボランティアな取り組み 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 25, 37-45.
- 広田照幸 2001 教育言説の歴史社会学 名古屋大学出版会
- 広田輝幸・伊藤茂樹 2010 教育問題はなぜまちがって語られるのか: わかったつもりからの脱却 日本図書センター
- 今津孝次郎 1997 教育言説とは 今津孝次郎・樋田大二郎(編) 教育言説をどう読むか—教育を語ることばのしくみとはたらき 新曜社 Pp. 1-17.
- 犬飼己紀子 2003 コミュニケーションのスキルアップをねらったグループワーク・トレーニングの実践 上田女子短期大学紀要, 26, 11-21.
- 河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗 2008 Q-U式学級づくり小学校低学年: 脱小1プロブレム「満足型学級育成の12カ月」 図書文化社
- 小林正幸 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校: 楽しく身につく学級生活の基礎・基本 図書文化
- Libet, J. & Lewinsohn, P. 1973 The concept of social skill with special reference to the behavior of depressed persons. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 40, 304-312.
- マツアリーノ 2004 反社会学講座 イーストプレス
- 大島みどり・本田千尋・北原麻理子・津久井敦子・中山純子・根本喜代江・小林正幸 2002 児童期における遊びと社会的スキルの関連—遊びの種類と頻度の視点から 東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 26, 111-126.
- 大久保智生 2011 批判心理学的視点による実証研究のあり方の検討: 批判心理学的視点から量的調査を行う意義 心理科学, 32, 49-54.
- 大久保智生・牧郁子(編) 2011 実践をふりかえるための教育心理学: 教育心理にまつわる言説を疑う ナカニシヤ出版
- 大谷宗啓 2007 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替: 心理的ストレス反応との関連にも注目して 教育心理学研究, 55, 480-490.
- 小沢哲史 2009 少年犯罪に対する専門家とマスメディアの言説史: 凶悪化・動機の不可解さ・衝動性・メディアの悪影響・一般化 和洋女子大学紀要, 49, 159-170.
- 田崎敏昭・坂本和子 2002 小学生に対する社会的スキル訓練の効果 佐賀大学教育実践研究, 19, 131-148.
- 辻大介 1999 若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア 橋元良明・船津衛(編) 子ども・青少年とコミュニケーションシリーズ・情報環境と社会心理3 北樹出版 Pp.11-27.
- 嶋田洋徳 1996 児童生徒の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 早稲田大学大学院人間科学研究科博士論文
- 瀧井宏臣 2004 子どもたちのライフハザード 岩波書店
- 戸ヶ崎泰子 1993 児童の社会的スキルが学校適応感に及ぼす影響 早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文